

## ループング・イフェクトと現象の創造

—偶然性をめぐる心理学史における「ヘーゲルの伝統」—

## Looping Effect and Creation of Phenomena

— Science of Contingency “in the Hegelian Tradition” —

大藪 敏 宏

OYABU Toshihiro

## 1. はじめに—敗戦国の悲哀と優位—

心理的なトラウマ概念は、フランス第三共和制下における「ヘーゲルへの没頭によって修正された実証主義」が「クーザン学派の唱えるスピリチュアリズム的教義」に対して行った「英雄的な闘争」を「実証主義的な心理学者」が「多重人格」の実証例を取りあげることによって遂行する過程で、主としてピエール・ジャネによって発見的に生み出されたものであった<sup>1</sup>。このピエール・ジャネのトラウマ概念がフロイトによってドイツ語圏にもたらされて、それがフロイト理論とともに英米語圏に広まった結果、今日においてはトラウマはむしろフロイトに始まる精神分析の用語としてフロイト起源のものと思なされることの方が多い<sup>2</sup>。ところでP. ジャネはフロイト理論の先駆的な理論的功績をもつものと評価されながらも、そして実際に大きな影響をフロイトの理論に与えたにもかかわらず、ジャネはフロイトの理論をついに理解できなかったと言われている。これはなぜであろうか。本稿は、この問題を理解する鍵として、「模写理論」や「ループング・イフェクト」論などの真理の様態論を検討する。

ここでトラウマの概念史にとって重要なことは、トラウマの概念が成立した歴史的必然性と偶然性との奇妙な結合である。「臨床においては、偶然的な要因(akzidentellen Faktoren)の重要性が強調される」と<sup>3</sup>、フロイトは臨床心理および精神分析における偶然性の契機の重要性を再三にわたって主張しているが、実はトラウマ概念が成立した歴史的状況における偶然性の役割も重要である。というのはフランス第三共和制下においてフランス社会が直面していた心理的状況のある意味での歴史的偶然性が関係しているからである。それは、敗戦国の悲哀(トラウマ)である。敗戦国こそがトラウマに最も苦しむが、しかもなおその敗戦国が徹底した合理主義精神を保持しながらトラウマの問題に実証主義的に取り組む科学的合理性と経済的余裕をなお保持しているときに、社会の日陰に隠れていたトラウマが科学的に問題化しうるようになる。長い歴史の中でそれまで潜在化したままで光が当てられなかったトラウマ(心的外傷)の問題に科学的な光を当てて、社会的に自覚化し問題化しうるようになり、社会的に対策をとろうとするような自覚的段階に至

るために、敗戦という偶発的な契機が必要であったとしたら、それはむしろ科学史と社会史における敗戦国の優位とも言える現象かもしれない<sup>4</sup>。本稿は、こうしたトラウマの心理学史とそれに関係する科学哲学を取り上げながら、真理の対応説に対する H.パトナムの終焉宣言とヘーゲル哲学との関連について考察する。さらに、今日の教育問題や社会現象に対する、このような科学哲学の示唆に及び、哲学に対する虚実二元論を再考する<sup>5</sup>。

## 2. 戦争の心理的影響に関する統計的報告とヘーゲル解釈

こうしたトラウマの科学的問題化のチャンスに人類史は二度恵まれている。一度目が 1870 年の普仏戦争に敗北することによって成立したフランス第三共和制下であり、二度目がベトナム戦争に敗北したアメリカ合衆国の 1970 年代下である。まず、前者の普仏戦争敗戦後のフランス第三共和制下において 1887 年にジャネによる心理的トラウマ概念が成立した。次に、後者のベトナム敗戦後のアメリカ合衆国においては、ベトナム帰還兵の心理的トラウマの問題にレイプ被害者のトラウマへのフェミニズムの支援運動が 1970 年代に結びついた結果として、1980 年のアメリカ精神医学会の DSMⅢにおける PTSD(心的外傷後ストレス障害)概念が成立したのである。1870 年からのフランス第三共和制は 1870 年の普仏戦争の敗北とともに始まる。『偶然を飼いならず』『決定論の浸食』過程を推進したフランスの統計学は、1874 年に普仏戦争の心理的影響に関する統計的報告『戦争痴呆症の精神病発現への影響について』をまとめている<sup>6</sup>。この報告には、普仏戦争の戦乱の中で愛国心から殺人を犯して誇大妄想や迫害感や幻視に苦しんで記憶喪失に至った農夫や、普仏戦争で失業した後に不眠症・譫妄・記憶喪失に苦しんで 1873 年に痴呆になった四十五歳の男や、家のすぐそばで起きた戦闘のあとに記憶喪失になった女性とか、パリ・コンミュン支持者に捕らえられて射殺されそうになった二年後に記憶喪失になった四十五歳の元警察官、等々の事例が登場する。まさに危機に晒された自我の同一性の時代であった。

こうした引き裂かれた自我の同一性に対して、安定した同一性にもとづく旧いスピリチュアリズム哲学(クーザン)は、それを取りあげて問題化する枠組みを持たなかった。その意味において引き裂かれた自我の同一性が抱えていた心の傷を哲学するうえで無力であったと言ってもいいかもしれない。

このような旧い哲学に対して、新しいヘーゲル理解が批判を始めた。このような「クーザン学派の唱えるスピリチュアリズム的教義」に対して、テーヌをはじめとする「ヘーゲルへの没頭によって修正された実証主義」がフランス第三共和政下において<sup>7</sup>、後世のフロイトの精神分析学の成立へと繋がるフランスのヒステリー(トラウマ)研究を生み出していくことになった<sup>8</sup>。

歴史の中で引き裂かれ苦悩し変貌するアイデンティティについての新しい実証哲学が統計学と結びつきながら初めてトラウマの心理学を生み出したのである。I.ハッキングの科学史研究によれば、精神の安定的な即自的同一性を軸にヘーゲルの精神哲学を理解する旧いスピリチュアリズム哲学に対する、不安定な精神の分裂する対自的対立矛盾の相を軸にヘーゲルの精神哲学を理解しようとする新たなヘーゲル解釈が第三共和政下における新たな実証主義的潮流と結びついたことが、トラウマの心理学の成立をもたらしたことになる。

初めてトラウマ神経症を統計学的に心理学的に捉える準備が、こうしてフランス第三共和制下

において整ったのである。あとは、クーザン流の古い哲学の最後の牙城を突き崩すための「秘密兵器」つまり「多重人格」の実証的症例が登場すれば、すべての準備が整うことになる。それが、コレージュ・ド・フランスの心理学主任教授のピエール・ジャネが後の 1906 年のハーヴァード講演で言及した古典的な二重人格者フェリーダ・X の症例報告であった<sup>9</sup>。

まさに歴史の中の偶然性が学理の必然性と結びついた中で、新しい理論枠組みが生みだされていったのである。フロイトによれば、臨床においては偶発的な要因が重要な役割を果たすというが、トラウマ概念の成立そのものにおいてもまた、敗戦にともなう人間の心理的な傷を実証的・統計的に扱うという場面において、その敗戦という偶発的な要因が大きなポイントを占めている。

さらに注意しなければならないのは、心理の正規性からのトラウマによるヒステリーないし PTSD の偏差(disorder)を測定しようという統計主義的な精神が働いているのもまた、1870 年の普仏戦争以後の第三共和制下だけでなく、1970 年代ベトナム戦争の敗戦後にアメリカの精神医学会がまとめた DSMIII で初めて PTSD が公認された場合にも共通している。この場合もまた、統計主義の精神に基づいている。というのも、DSM とは Diagnostic and Statistical Manual…の頭文字であるが、この精神障害診断マニュアルの名称そのものに、統計主義的方法による診断と明言されているからである。

こうして統計主義の歴史と多重人格概念の成立の重要な契機を負うトラウマ心理学の歴史とは、深刻な科学史上の関連性をもっているのであり、ハッキングという現代の科学哲学・科学史研究を代表する哲学者が、決定論の浸食という偶然の統計的处理をめぐる科学史と多重人格現象という、一見無縁とも思える二つの問題に科学哲学者として取り組むことには、実は哲学的必然性があるのである。

### 3. 偶発的「事故」の今日的概念

ところでトラウマをめぐる「偶発的な要因(akzidentellen Faktoren)の重要性」は、こうした科学史における偶発的な要因にとどまらない。ここでの偶発的とはアクシデンタル(akzidentellen)であるが、今日におけるアクシデントの日常的な意味は偶発的な「事故」である。

たとえば 2001 年 11 月に開かれた国連総会の最中に 2001 年 9 月 11 日からちょうど 2 ヶ月後の日付に、9 月 11 日の同時多発テロとほぼ同じ時間の朝 9 時頃という偶発的なタイミングで、米国内で旅客機が墜落して建物が巻き込まれるという事態が起きたときに、その国連総会に出席していた米国のパウエル国務長官(当時)は諸国の支援と慰めに感謝した上で、その総会の場で「これまでの情報によれば、今回の墜落は事故 accident と見られる」と述べた。その際にニューヨークのクィーンズ地区の住民は、「この墜落は事故ではないと思う。テロが予告されていたのだから、今回の墜落は予測されたものだと思う」とも話している(当時の米国テレビ報道)。死者や被害が取り返しがつかないわけではないという意味では同じ結果であるにもかかわらず、ここで事故であるのか、事件(テロ)であるのかで、社会的な意味はまったく異なる。特に責任の所在と重大さにおいて何かが、おそらくは社会的な意味が大きく異なるのである。

ここで思い出されるのが、ピエール・ジャネの『心理自動症』(1889 年)が、その身体的症状をヒステリーに典型的な「スティグマ(聖痕)」と「偶発的症狀(accidental symptoms)」とに分類し

て、下肢麻痺—それはチャップリン『ライム・ライト』の物語の最初の引き金となったものでもある—というような偶然的症状は、その外傷の原因との象徴的なネットワークの中であって、「事件をどう考えているかによって症状の形が決まる」と書いていたことである<sup>10</sup>。人間の責任とは無縁な偶発的病気や偶発的事故あるいは自然災害と考えられるとき、そのトラウマは軽減される可能性が考えられうる—キリスト教神学を範型とするタルコット・パーソンズの社会学が指摘した米国の道具的活動主義(*instrumental activism*)もまた、同じ象徴的なネットワークの中において生み出された<sup>11</sup>—。しかし、人間の自由意志にもとづく「テロ」や「犯罪」と認識されるとき、「悪」だの「悪の枢軸」だのという倫理的断罪が浮上し、トラウマが深刻化して、「悪」への悪無限的なモグラ叩きの神経症が始まる—この文脈において、この象徴的ネットワークがジャック・ラカンの言う「現実界」を構成することを指摘したのが、スラヴォイ・ジジエクであった<sup>12</sup>—。こうしたトラウマの「心理自動症」が、かつてヒステリー患者への「魔女裁判」や「魔女狩り」につながり、今日における「テロリスト狩り」や「テロ支援国家への対テロ戦争」を「心理自動症」的に引き起こすことになる。

ここにもヒステリー狩りをする側が、既にヒステリー症状を起こしているという精神的共鳴現象—共依存的「ルーピング・イフェクト」現象—が見られるが、こうした精神的共鳴現象は、既にヘーゲルの『精神哲学』における精神病理現象への考察や『精神現象学』における「不幸な意識」から「十字軍」に至る「自己意識」の弁証法、さらに「精神」章における古い「信仰」に対する「啓蒙」の戦いの弁証法において既に批判的に叙述(=神の現示)されていたものである。ヘーゲル自身はこうした循環的な不幸な弁証法の中にこそ、神の現示を予感していたようである。

しかし、こうしたヘーゲル自身の予感とは別に、「事件をどう考えているかによって症状の形が決まる」というピエール・ジャネの分析は、日本の重要な作家古井由吉が出会った聖修道女マリア・エブナーの日記の思想に通底する。修道女マリア・エブナーは、幾多の病苦によって病床に磔られながら、傍らの少年のキリスト像の声に耳を傾ける日記を書き残して死んだ。そしてこの修道女は、病苦を癒す聖修道女として信仰の対象となって今日に至っている。この日記に出会った古井由吉は、T.リーメンシュナイダーの彫像、特にキリストの磔刑像を辿りながら、苦痛をむしろ神の恩寵として受け入れる救済の思想、終末を回生と考えるキリスト教の思想に注目する。ここに、偶発的な事故や病気に対してキリスト教がどのような参照枠を提供してきたのが、今日においても重要な意味を持っていることが示されている。そして同時に、T.パーソンズが指摘した「病気」というものがアメリカというキリスト教国において果たしている独特の社会学的機能(それは今やアメリカにとどまらず半ばグローバル化しているのだが)の根底にあるものでもある<sup>13</sup>。今日の機能主義社会学のシステム論は、この象徴的ネットワークから展開したものである—したがって、このシステム論と、本稿7節の分析哲学におけるヒラリー・パトナムの真理の対応説への批判とは、このネットワークの観点からは表裏一体とも言える—。

#### 4. 産業資本主義の産物としての「事故」概念

中世神学においては、アクシデント(偶有性)とはそれが変わったりなくなったりしても実体そのものが破壊されないような、その物の非本質的な性質(偶有的属性)を表していた。たとえば三

角形にとって三つの辺をもつという属性は本質的属性であるが、その三つの辺の長さや角の鋭角や鈍角等は偶有性(アクシデント)ということになる。ハッキングによれば、突然起きる破壊的な有害な出来事という事故という意味でのアクシデントという意味は鉄道事故に由来し、事故と責任に関連するほぼすべての不法行為法は鉄道との関連で生まれた、という。いわゆる事故自体は昔からあったはずであるが、工業化社会になるまでは炭鉱事故や鉄道事故というような言い方をすることはなかった、というのである<sup>14</sup>。

1830年9月15日に蒸気機関車による世界最初の旅客鉄道であるイギリスのリバプール・マンチェスター鉄道が開通した。この開通式に招待されて開通記念列車に試乗したリバプールの代議士 W.ハスキソンが途中の駅で下車して反対方向から来た列車に轢かれて死亡した。これが世界最初の鉄道事故と言われている。そして1840年に事故に関する英国王立委員会が設置された。1896年イギリスで死者二人を出したのが、自動車による世界最初の死亡事故とされている。つまり、事故とそれにまつわる怠慢の責任や負傷等に対する賠償責任といった問題連関は、まさに産業革命の産物であり、私有財産制度にもとづく近代産業資本主義の発展の副産物なのである。利潤追求のための副産物としてもたらされた事故には、利潤追求のための自由な経済活動と不即不離の責任においてその利潤から事故や事件や災害にともなう賠償責任を果たさなければならないという問題連関の成立にともなって、このような「事故」概念は成立した。トラウマは大昔からあったはずにもかかわらず、心理的なトラウマ概念が成立したのが1887年であったように、PTSDという認識枠組みの成立はアメリカでは1980年を、しかし日本では阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きた1995年以降を待たなければならなかったように、実は事故や事件という概念の成立自体が特殊な歴史性を帯びたものであることを銘記しなければならない。

そして、こうした既成概念の前提と成立構造との意識的自覚化作業こそが、哲学の重要な任務の一つである。戦場での記憶のフラッシュバックに苦しむベトナム帰還兵の心の問題は、1982年の映画『ランボー』などで先駆的に取りあげられたが、しかしその当時この映画で取りあげられた題材がPTSDの問題として言及されることはほとんどなかった。それは1980年のアメリカ精神医学会のDSMⅢで初めてPTSDが概念的に定式化されたものの、このPTSD概念を認知していたのはアメリカの学会内の専門家に当初は限られていたからである。たとえば日本においても1988年や1989年および1995年の頃の広島市の被爆者の体験談においても、被爆後数十年を経たなおフラッシュバックが起きると「どうしてだかわからないけれども」何かに憑かれたようになって自分を制御できなくなるという苦悩を語られた場合においても、それはまさに「どうしてだかわかれなれないけれども」そういうことがあるのであろうと、想像するより他はなかった。つまり「概念なき直観は盲目」(カント『純粹理性批判』)なのである。しかし、それは現在では明らかにPTSDとして概念的に定式化することが可能なものである。カントが言ったように概念を獲得して初めて、理解が可能になるのである。

同様に、しかし新しい現実に対応した概念の獲得は、新しい現実を現実として取りあげる第三共和制下において採用されたコント的な実証主義によって「フェリーダ」という二重人格の症例が新しい現実として取りあげられるまでは、「多重人格」や「トラウマ」という新しい概念自体が、その新しい「偶然性」概念とともに構成されることはなかったのである。

## 5. ルーピング・イフェクトの科学哲学

たとえ戦争や災害等にもなうトラウマ神経症そのものは古代からあるにしても、それらをトラウマ神経症の現象として認識するためには、その現象に対応したロゴス(言葉ないし概念)が不可欠である—「現象の救済」がロゴスの任務である、という伝統的な枠組みによる—。哲学の重要な任務の一つが概念の意識的自覚化作業であると述べたが、概念的な枠組みの成立なしには現象理解が成立しないということを、カントの『純粋理性批判』は、「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である」(K.d.r.V,B75)と表現したのである。そしてカントは特にその概念(カテゴリー)をアリストテレスの判断の分類表から演繹した。カントによるこのカテゴリーの演繹に「安易」という批判を加えたヘーゲルは<sup>15</sup>、概念の導出作業を歴史の中の意識の経験を辿る『精神現象学』および『論理学』によって導出した。人間の認識枠組みが歴史的に意識の共同的な経験作業の中で構成されるという、いわば概念の歴史化は、ヘーゲルによって着手されたといつてよい。現象を理解する枠組みである概念というものが必ずしもアプリアリに生得的とは限らないで、歴史の中で意識の共同的な社会的経験の中で成立するプロセスの分析こそ、ヘーゲルが着手した哲学である。この概念の社会的構成へのヘーゲルによる研究の着手については、実は既にアドルノ『否定の弁証法』が指摘している<sup>16</sup>。

ところが、このトラウマをめぐる社会的に新しく構成された概念が登場するとき、人間を根本的に刷新して(ハッキングは「新しい人間になる」と表現する)しまい、人間の心を再構成し直してしまうという事態を、ハッキングは「ルーピング・イフェクト」という重要術語で表現する。ハッキングは多重人格現象をめぐる医学(科学的)の見解の変動を科学的に精査しながら、次のように「ルーピング・イフェクト」を説明している。——「1840年代の医者の中にも、多重人格の患者を抱えている者はいたが、彼らが捉えたこの障害の像は、1990年代においてよく見られるものとは大きく違っていた。医者が見解が違っているのは、患者が違っているからだ。しかし、患者が違っているのは、医者が期待するものが違っていたからでもある。これはきわめて一般的な現象の例、すなわち『ルーピング・イフェクト』だ。ある方法で分類された人々は、自分たちが分類された通りに変化してゆく傾向にある。しかし同時に、彼らに変化していくにつれて、分類と記述は絶えず改訂されねばならない。多重人格はこのような効果を完璧なまでに説明した実例である」<sup>17</sup>——。

このようなルーピング・イフェクト論の原初的な理論の原形は、実はハッキング『表現と介入』(1983年)において既に提示されていた。だから『表現と介入』から『偶然を飼いなす』(1990年)を経て多重人格論の『記憶を書きなおす』(1995年)の「ルーピング・イフェクト」論に至るハッキングの科学哲学は、題材を量子力学から統計学を経て多重人格に変えながらも、首尾一貫して新科学哲学の視点によって貫かれていることが分かる。「ルーピング・イフェクト」論はかつての「介入(intervening)」論の発展形である。

## 6. ドイツ近代哲学と今日の新科学哲学

分類する方法(概念枠組み)と分類される対象とは、カント哲学のように二極分化しているので

はない。対象から完全に分離した純粋なカテゴリー(だからカントは純粋悟性概念とも呼ぶ)を、質料性をもった対象に対して外的に外側から「適用」できるという二元論的な文脈をカントは保持し続けたが、このような外的な「適用」のもつ「疎遠さ」をヘーゲルはむしろ意識の「疎外」の所産と考えて、両者の間に密接な連関性(共犯関係性)があることを指摘した。これがカント批判哲学の「批判」性をカント哲学の二元論的枠組み自身へと「徹底操作」することによるヘーゲルによる批判哲学のラジカライズ(徹底操作)である。

分類枠組み(概念)の変化に応じて、分類される対象の側も変化し、さらに対象の側の変化に応じて分類枠組み(概念)もまたさらに更新されなければならないというハッキングの言うルーピング・イフェクトは、ちょうどヘーゲル『精神現象学』における意識とその対象の間のフィード・バック的な相互止揚関係が先駆していたものとも言える。つまりヘーゲルの『精神現象学』における弁証法的な進行とは、それぞれの意識形態にそれぞれの対象形態が対応していて、具体的には、「感覚的確信」という意識に対して「このもの」という対象が連関して、この連関が発展して廃棄された結果として「知覚」という意識に対して「物」という対象が連関し、さらにこの連関が発展して揚棄された結果として「悟性」という意識に対して「力」という対象が連関するようになり…等々、対象を捉える意識の分類枠組み(概念)の変化に応じて、分類される対象の側も変化(あるいは止揚)している<sup>18</sup>。

しかし、この意識と対象との間の相互フィード・バック連関は、ヘーゲルの精神現象学においては、意識の対象が自然ではなく人間になるところから互いの「承認」の失敗の「トラウマ」が残存し介在するようになる。人間の意識の対象が人間ないし人間意識になるのは、つまり意識に対して意識があるようになるのは、『精神現象学』においては「悟性」の次に登場する「自己意識」からである。そしてこの「自己意識」において主人と奴隷との間の生命を賭した戦い、ストア主義とスケプシス主義と不幸な意識という有名なくだりに欲望が容易に達成されない「トラウマ」の残存を看取ることは難しいことではない。このように人間が自然の対象に向かう場合(ヘーゲル『精神現象学』では「悟性」章まで)から、人間が人間という対象に向かう場合(ヘーゲル『精神現象学』では「自己意識」章以後)への大きな飛躍によって、「ルーピング・イフェクト」に心理的「トラウマ」が介在するようになると同時に意識が歴史を引き受けるようになる。このことは、ハッキングが「ルーピング・イフェクト」を主題的に論じた論文において自然と人間、自然科学と人間科学との間の違いに再三再四注意を喚起するのと対応している<sup>19</sup>。

## 7. 真理の模写理論の「逝去」と「ヘーゲルの伝統」

このように、ハッキングのルーピング・イフェクトは奇妙なほどにヘーゲルの意識哲学の枠組みと符合しているのであるが、しかももちろんハッキングはヘーゲル哲学の影響下において、このような理論を展開したのではない。ハッキングの方は、もちろん 20 世紀の英語圏の分析哲学と科学哲学の潮流の中で思考してきた。後期ウィトゲンシュタインやトーマス・クーンらの言語哲学や科学哲学が、ハッキングの哲学的思考の背景をなしている。その点でリチャード・ローティと共通しており、新科学哲学(new philosophy of science)という最近の科学哲学の主要潮流の担い手と言っていい。そしてだからこそ、『哲学と自然の鏡』という主著をもつローティと同様に

ハッキングもまた、ヘーゲル哲学に対しては極めて微妙な言い回しをする。

1980年代のハッキングの著作に、「自然科学の哲学への入門的トピック」というまさに科学哲学の入門書的な副題が付された『表現と介入』(1983年)がある。——「ハンガリーでヘーゲルのかつマルクス主義的伝統の教育を受けていたので、ラカトシュは対応説のポスト・カント的、ヘーゲル的解体を当然のことと看做していた。彼はそれゆえパースに似ていたが、後者もまたヘーゲルの土壌の中で育ち、他のプラグマティストと同じく、ウィリアム・ジェームズが真理の模写説と呼んだものを相手にしなかった。20世紀の初頭にイギリスで、そして次いでアメリカで、哲学者達はヘーゲルを攻撃し、真理の対応説と指示による意味の説明を生き返らせた。これはいまなお英語圏の哲学の中心的話題なのである。この点ではヒラリー・パトナムが教訓的である。『理性、真理、歴史』の中で彼は対応説に引導を渡す自分自身の試みを行っている。パトナムは自分自身を全くラディカルと看做しており、『われわれがここに見るのは、2000年以上にわたって永らえた理論の逝去である』(74頁)と書く。ラカトシュとパースはその一族の死は約200年前に起こったと考えていた。とはいうものの二人とも<西洋の>科学の客観的価値の説明を望んだ。そこで真理の代用となるものを見出そうとした。ヘーゲル的伝統の中で、それは過程の中に、知識の成長それ自体の本質の中にある、と彼らは言った<sup>20</sup>。20世紀の英語圏の科学哲学の帰結として、科学の客観性を科学的知識の展開の中に見るといふ科学哲学の科学史への還元ないし収斂ともいふべき事態を、ラカトシュはカントの名言をもじって「科学史なき科学哲学は空虚であり、科学哲学なき科学史は盲目である」と述べた<sup>21</sup>。ハッキング自身はパトナムやラカトシュとは異なる科学的实在論を、つまり人間の「介入」によって現象が創造されるという意味において新しい科学的实在論を展開する。

このようにしてみると、ローティとパトナムとが揃って来日した際のシンポジウムにおいて、ローティもパトナムもヘーゲル主義者だとローティが発言したとしても、驚くほどのことではなく、自然なことであったのかもしれない。

## 8. おわりに—「現象の救済」から「現象の創造」へ—

ここで「現象」という哲学的用語に対して、ハッキングは「効果(effect)」という物理学的用語を導入する<sup>22</sup>。<現象>という用語は、世界に「介入」しない中立的な観察者が記録できる出来事を予想させるのに対して、<効果>という用語は、「ホール効果」のようにしばしばそれを発見した偉大な実験家の個人名が冠せられるように、実は自然の推移に「介入」してその規則的な効果(現象)が観測されるような実験装置を工夫することによって初めて発見されるような法則的出来事である。実験は反復されるのではなく現象が規則的に引き出されるようになるまで絶えず改良される<sup>23</sup>。ハッキングは伝統的な「現象の救済(to save the phenomena)」説に対抗して独自の「現象の創造(creation of phenomena)」説を展開するにあたって、ホール効果は特別に工夫された装置の外部には存在していない、と示唆するのである<sup>24</sup>。ホール効果は、特定の歴史の中で自然過程へのホールという特定の「介入」者が、偉大な工夫をこらして実験室の中でそれを孤立化し、純粹にして、その現象を「創造」する方法を発見するまでは存在していなかったのではないかとハッキングは主張しているのである<sup>25</sup>。これが1983年のハッキングの介入主義的科学的事



在論の要点である。だからその最後でハッキングは、次のように言うのである。——「科学的反實在論に対する私の攻撃はマルクスの、当時の観念論に対する猛攻撃と類似している。両方とも要は世界を理解することではなく、変えることだと言う」<sup>26</sup>。つまり人間は世界から客観的に分離して世界を中立的に認識したりするのではなく、だから客観との対応によって真理が保証されるというような真理の対応説などを相手にすることなく、人間は世界の過程に「介入」することによって現象を創造するのであり、そこに実在性が成立する、これがハッキングの哲学であり独自の科学的實在論である。このことを直截簡明に表現しているのが、「効果」という創造的實在である。だから、ハッキングが「効果」という物理学的用語を用いるのは、以上のような 20 世紀科学哲学史の論争史とその成果を背景にしてである。自然科学においては、こうした現象の創造を通じて世界が創造され変革されるのである。

しかしさらに、こうした「現象の創造」は自然科学の狭い専門的分野だけに限ったことではないことに注意が向けられなければならない。なぜなら、本稿第 5 節末尾で言及したように、これはルーピング・イフェクト論に発展しながら 1995 年の『記憶を書きなおす』において、「多重人格」現象の創造ないし社会的構成主義的増大という問題へと展開されていく以上は、今日の社会的諸現象の多く、たとえば「いじめ」現象や「発達障害」現象の「増大」あるいは「学力低下」現象というような教育問題にも波及しうると想定されるからである。たとえば「発達障害」現象をめぐる「障がい」等の表記問題等にそうしたルーピング・イフェクトの効果(作動)を読みとることも可能かもしれない。今日的問題の「現象の救済」を図る際には、「現象の創造」を考慮しなければならないことが示唆されていることになる<sup>27</sup>。

## (註)

<sup>1</sup> 拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」『人文社会学部紀要』第 3 巻、富山国際大学、2003 年。

<sup>2</sup> 下中邦彦編集発行『大百科事典』第 7 巻 1003 頁、平凡社、1985 年、「心的外傷(psychic trauma)」の項目、。

<sup>3</sup> S. Freud, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, Verlag Franz Deuticke, 1905. *Gesammelte Werke, Fünfter Band*, S. Fischer Verlag, 1991, S29, S.141. フロイト「性理論三篇」『エロス論集』中山元編訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1997 年、18 頁、195 頁。

<sup>4</sup> 山崎正一はカント哲学の成立に関連して「後進国の優位」という概念を提出していたことを参照。山崎正一『カントの哲学—後進国の優位—』東京大学出版会、1957 年。

<sup>5</sup> 虚実二元論については、本稿の真理の対応説の終焉ならびに「ルーピング・イフェクト」、参照。さらに、Cf. Slavoj Žižek, *Welcome to the desert of the real! : five essays on September 11 and related dates*, Verso Books, 2002.

<sup>6</sup> Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press, 1995, p.188, ハッキング『記憶を書きかえる』北沢格訳、早川書房、1998 年、234 頁。

<sup>7</sup> Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, p.164. ハッキング『記憶を書きかえる』、203 頁。

<sup>8</sup> 前掲拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」、13 頁。

<sup>9</sup> 前掲拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立—P.ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立」、12 頁。

<sup>10</sup> Pierre Janet, *The Mental State of Hystericals, A Study of Mental Stigmata and Mental Accidents*. New York, G.P. Putnam, 1901, p.358, Allan Young, *The Harmony of Illusions --Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1995. アラン・ヤング『PTSD の医療人類学』中井久夫他訳、みすず書房、2001 年、34 頁。

<sup>11</sup> 道具的活動主義 (instrumental activism) については、T. パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳、新泉社、1990 年、216 頁、225 頁、参照。

<sup>12</sup> 前注 5)、 Cf. S. Žižek, *Welcome to the desert of the real!*.

<sup>13</sup> 前注 11)、参照。

<sup>14</sup> Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, p.185, 『記憶を書きかえる』、230 頁。

<sup>15</sup> G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Die Wissenschaft der Logik*, Werke in zwanzig Bänden. Theorie-Werkausgabe, Bd.8, Suhrkamp (Frankfurt a. M), 1971, § 42. G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Werke in zwanzig Bänden. Theorie-Werkausgabe, Bd.3, Suhrkamp (Frankfurt a. M), 1971, S.181f.

<sup>16</sup> T.W.Adorno, *Negative Dialektik*, stw113, 3. Aufl. Suhrkamp, 1982, S.263f., S.344f.. アドルノ『否定弁証法』木田元他訳、作品社、1996 年、323 頁、426 頁。

<sup>17</sup> I. Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, p.21. ハッキング『記憶を書きかえる』、29 頁以降。

<sup>18</sup> このような意識と対象との間のルーピング・ネットワークや無意識と夢とをめぐって、本稿 3 節における外傷の原因との象徴的ネットワークにおけるルーピング・イフェクトを子どもを念頭に表現したものとして日本の児童文学史上高名なものに、小沢正『目をさませトラゴロウ』(理論社、1979 年)がある。これは小学校中学年向けの絵本としても刊行されており、また『トラゴロウとふしぎなほこ』という紙芝居としてNHKサービスセンターから出版されている。そこには暴力の場面が表現されることも多いので忌避する教育関係者も少なくはないが、これはフロイトの精神分析学との関連が夙に指摘されているハリウッド映画との共通点でもある。

<sup>19</sup> I. Hacking, *The Looping Effects of Human Kinds*. In *Causal Cognition ; A Multidisciplinary Approach*, ed. by D. Sperber, D. Premack, and A.J. Premack, Clarendon Press, pp.353, 362ff.

<sup>20</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening, Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge University Press, 1983, pp.112ff. ハッキング『表現と介入—ボルヘスの幻想と新ベーコン主義—』渡辺博訳、産業図書、1986 年、183 頁以降。

<sup>21</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.124. ハッキング『表現と介入』、202 頁。

<sup>22</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.224. ハッキング『表現と介入』、364 頁。

<sup>23</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.231. ハッキング『表現と介入』、377 頁。

<sup>24</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.226. ハッキング『表現と介入』、368 頁。

<sup>25</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.226. ハッキング『表現と介入』、369 頁。

<sup>26</sup> I. Hacking, *Representing and Intervening*, p.274. ハッキング『表現と介入』、448 頁。

<sup>27</sup> しかしさらに、今日の新实在論は、「いじめ」現象や「体罰」現象の考察への示唆にとどまらない。人間が世界の「過程」に「介入」することによって現象を創造し、そこに实在性が成立するというのは、富山発の「文明批評の実践」の哲学運動が現在までの約 40 年間に渡って実現していることでもあり、あとはこの実証例を理解し評価しうるような枠組みや概念の構成が課題として残されているのみである。今日の新しい科学的实在論にせよ、この富山発の「文明批評の実践」にせよ、実は「実体」から「機能」へという 20 世紀における現代哲学の主要潮流に棹さしている。この 20 世紀以来の現代哲学の主要潮流については、次を参照。E. Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntniskritik*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Reprografischer Nachdruck der 1. Aufl., Berlin 1910, 1994. 今日の新しい科学的实在論は、このポスト・ウイトゲンシュタインの分析哲学の 20 世紀後半における変容と新カント派の認識論的科学哲学との合流という方向性から理解することもできるが、さらにその実践哲学の方向性の展開がなお課題となっている。この方面ないし分野における地域哲学の歴史的展開については、拙稿「ボランティアの環境倫理学—戦後造林政策の限界と 35 回目の草刈り十字軍運動—」(『国際教養学部紀要』第 5 巻、富山国際大学、2009 年)、同「里山のナラ枯れをめぐる実践的環境倫理と環境教育—「木を育て、人を育てる」里山環境リテラシーの実験—」(『国際教養学部紀要』第 7 巻、富山国際大学、2011 年)、同「国際日本学の課題と富山の哲学運動—「共存」哲学の「なつかしさ、やさしさ」のアルケオロジーと国際理解—」(『子ども育成学部紀要』第 3 巻、富山国際大学、2012 年)。